

シナリオ【サイボーグ花ちゃん】
決定稿・イワモトケンチ

§一 郊外都市（夕）

カナダ・トロントのような郊外都市の全景。
夕日がニュータウンの壁を染めている。
不気味なヘリコプターの旋回音。

§二 ドライフイン・前（夕）

アメリカンなドライフイン。
トラックが二台と黒いワゴン車が停っている。

§三 ドライフイン・店内（夕）

壁に飾られた鹿の剥製（頭だけのやつ）。
アメリカンなジュークボックス。
一人で四人掛けのテーブルに座って分厚い専門書を読む、博士。
テーブルには食べ終わった食器。
店員がコーヒーポットを持って現れる。
「お代わりはいかがですか？」
「ありがとう」
店員、コーヒーをカップに注ぐ。
博士、真剣に本を読み続けている。
店員、コーヒーを注ぎ終わり、立ち去る。
ゆっくりとコーヒーカップに手を伸ばして飲む。
視線を宙に浮せてなにやら考えことをしている。

店員
博士

§四 ドライフイン・前（夕）

トラックが二台と黒いワゴン車が停っている。
博士、店から出てくる。

黒いワゴンの鍵を開けて乗り込む。
エンジンを始動させ、走り出す車。

§五 走る車・車内(夕)

博士が運転する黒い軽ワゴン車が交通量の少ない郊外のバイパスを走る。
横断歩道前の信号機が黄から赤に変わる。
一人の制服を着た男子高校生が横断歩道を渡っている。高校生、立派な体格している。
柔道部らしく、柔道着を持っている。
反対車線から爆音と共に爆走してくるシャコタン車。大きな旗を持ったスキンヘッドの男がハコ乗りして叫んでいる。
高校生、シャコタンに激しくひかれる。
ひかれた反動で体が空中に飛ぶ。
シャコタン、タイヤを鳴らして猛烈なスピードで逃げて行く。
博士の車のボンネットに落ちて来る、高校生。全身血だらけ。
頭が取れて地面に転がっている。
博士、周囲を見回す。
車も人もゼロ状態。
博士、車から静かに降りる。にやにや笑っている。

後ろのトランクを開けて大きな袋を取り出す。
博士、笑いながら血だらけの高校生の所へ大きな袋を持って移動する。
袋の中に体と頭を入れる。
大きな袋を引きずるように車へ運ぶ、博士。
博士、運転席へ移動してドアを閉める。
急発進する博士の車。
排気ガスがカメラ前をおおう。

§六 メインタイトル「サイボーグ花ちゃん」

メインタイトルが浮び上がる。

＃七 テーマソング&イメージ映像（25秒）

以下のテーマソングに「花ちゃん」イメージ映像。声優&スタッフ・クレジット。
ぼくらのヒーロー
わたしのアイドル
指先強くて一万馬力
お尻も強くて二万馬力
頭はちよつと弱くて
マイナスイ〇万馬力
だけどいい奴なんだ
花ちゃん。花ちゃん
スーパースイボーグ
花ちゃん。花ちゃん
スーパースイボーグ
花ちゃん。花ちゃん
スーパースイボーグ

＃八 研究所・研究室（深夜）

タイトル 「第一話・花ちゃん誕生するの巻」

コンクリートの壁に囲まれた地下室らしき部屋。

訳のわからないマシンが部屋中にある。
先程の高校生の胴体だけが皮のベッドに横たわっている。
首から無数のコードが露出している。
博士、入口の方へ移動する。入口ドア横に大きな冷蔵庫。
冷蔵庫を開け、中から大きな頭を出す。先程の高校生とはまったく違う顔だち。こちらにも首の付け根から無数のコード。
博士、頭を持って胴体の方へ移動する。
頭と胴体のコードを接続する。

第九 研究所・全景（深夜）

古くて大きな洋館の全景。
雷が鳴り、夜空がピカリと光る。

第一〇 研究所・研究室（深夜）

ベッドの高校生、顔と胴体が接続されている。
博士、無表情に大きなレバー式スイッチの前に
立っている。
スイッチを渾身の力をふりしぼってオンにす
る。

高校生の全身に稲妻が走る。
振動で体が微かに動いている。

高校生の目が静かに開く。

博士、嬉しそうに近づいて行く。

高校生「花ちゃん、目は開いているが反応しな
い。」

博士、白衣の内ポケットから八つ折りにした半
紙を取り出し、広げる。

半紙には達筆な習字で「命名・サイボーグ花
ちゃん」と書かれている。

博士 「命名・サイボーグ花ちゃん！」

博士、半紙を花ちゃんの体に貼り付ける。

花ちゃん、口を少し開く。

「さあ、花ちゃん。立ちなさい」

花ちゃん、静かに頭を持ち上げる。

「（少し興奮して）そうだ。そのまま！」

花ちゃん、上半身を起こす。

博士 「そうだ。そのまま」

花ちゃん、立ち上がる。

博士、うれしそうに拍手する。

博士 「グレート！ワンダフル！」

花ちゃん、顔をゆっくり左右に振りながら部屋
を見回している。

花ちゃん、入口方向へぎくしゃくと歩き出す。

ドアの前で立ち止まり、首を傾げる。
心配そうに花ちゃんの後ろに回ってついて行く、博士。

博士

「花ちゃん、それはドアだよ」

花ちゃん

「どこあ…？」

花ちゃん

「人差し指でドアを押す。」

博士

「そのまま指がドアに刺さる。」

博士

「驚いている博士。」

博士

「すばらしいパワーだ！」

花ちゃん

「花ちゃん、博士を無表情に見る。」

花ちゃん

「花ちゃん、君は正義の味方なのだ」

博士

「その素晴らしい力で正義を守るために生れたのだよ」

花ちゃん

「（ゆつくり）せ・い・ぎ」

花ちゃん

「（ゆつくり）せ・い・ぎ」

博士

「（ゆつくり）せ・い・ぎ」

花ちゃん

「（ゆつくり）せ・い・ぎ」

博士

「そうだ。正義だ」

花ちゃん

「花ちゃん、指を持ち上げる。」

博士

「ドアの金具が外れる。」

花ちゃん

「指一本でドアを持ち上げる、花ちゃん。」

博士

「とれた」

花ちゃん

「ドアを博士に見せようと振り回す。」

博士

「あ、危ない」

花ちゃん

「ドアのカドが博士の頭部を激しく直撃する。」

博士

「博士、数メートル体が飛んで倒れる。」

花ちゃん

「花ちゃん、ドアを持ったまま博士に近づき、

博士

「のぞき込む。」

花ちゃん

「？」

博士

「博士、血だらけで口から泡をふいている。」

花ちゃん

「指に刺さったドアを取るうと腕を振る、花ちゃん。」

博士

「ドアが指から外れて飛ぶ。」

花ちゃん

「外れたドア、倒れた博士の頭の上に落ちる。」

博士

「ギクシヤクと歩いて部屋から出て行く、花ちゃん。」

ん。

§ 一 研究所・廊下（深夜）

タイトル「第二話・花ちゃん勉強するの巻」

廊下をギクシャク歩く、花ちゃん。

博士、ふらふらしながら花ちゃんの後を追う。

花ちゃん、廊下に飾ってある花瓶の花の前で立ち止まり、花を見つめる。

博士、静かに近づいて花ちゃんの後ろに回り込む。

花ちゃん

「…きれい…」

と言いながら花に向かって指を差し出す。

そのまま花を抜けて壁に刺さる、花ちゃんの指。博士、花ちゃんの後ろで何かしようと身構えている。

花ちゃん、指が壁から抜けないようでモジモジもがいている。

博士、花ちゃんの高頭部・頭髮部分を持ち上げる。スイッチらしきものが現れる。

スイッチを押す、博士。

花ちゃん、急に体が固くなって動かなくなる。

博士、脱力上体で床にしゃがみ込む。

博士

「ふっ…」

§ 二 夜明けの新宿（朝）

薄明るい光の中の街の風景。

始発電車が走って行く。

§ 三 研究所・研究室（朝）

黒板の前に頭に包帯を巻いた博士が立っている。

黒板に「正義」「国家」「天皇」という文字が書かれている。

花ちゃんが机に向っている。

博士

「日本というのはもともと天皇制を中心とした国家形態を取っていた。天皇は政治、経済、軍隊すべての最高責任者だった。しかし、第二次世界戦争の敗北によって今まで続いていた天皇制のシステムが……」

花ちゃん、頭を抱えて考え込んでいる。

花ちゃん

「……むずかしい……」

博士

「わからないのかい？」

花ちゃん

博士、心配そうに花ちゃんを見ている。

花ちゃん

「（頭を抱えて）……あたま……いたい……」

博士

「じゃあ。もっと簡単に説明するよ。いいか。」

花ちゃん

花ちゃん。君は正義の味方だ。君は正義を守る。

花ちゃん

それが君の絶対使命。わかるかね！」

花ちゃん

「……ぜたい……しめ……？」

花ちゃん

花ちゃん、再び頭を抱えて考え込む。

花ちゃん

「……むずかしい……」

博士

博士、首を傾げる。

博士

「いかん。脳が恐ろしくあんなぼんたんだ。なんとかしなければ……」

博士

博士、花ちゃんに近づく。

博士

「花ちゃん、ちょっと脳の手術をして賢くなる

う」

花ちゃん

花ちゃん、立ち上がってギクシャクと部屋の片

隅に逃げる。

花ちゃん

勢い余って壁に衝突する。壁に大きな穴が開く。

花ちゃん

「……や……あたま……や……いたい……や……」

花ちゃん

花ちゃん、頭を押えて怖がっている。

§一四 脳手術のイメージ

頭部がくり抜かれ、脳が露出している。細かいコードを一本づつ繋げて行く、博士の手。

§一五 研究所・研究室（朝）

花ちゃん、うずくまっている。

花ちゃん

「……や……いたい……」

博士、困っている。

博士

「わかった。わかったよ。手術はやらない」

博士、花ちゃんに近づいて隣に座る。

博士

花ちゃん、顔を上げて涙目で博士を見つめる。
「そのかわり勉強を一生懸命しなさい。いいかい。約束だよ」

花ちゃん、大きくうなずいた後、元気良く立ち上がる。

花ちゃん

「やる…べんきよ…」

椅子が倒れて壊れる。

博士、過敏に反応して素速く逃げる。

§一六 研究所・花ちゃんの部屋（昼）

大きな花や動物のペイントのある部屋。ポップな子供部屋のイメージ。

カメラ、部屋の壁をゆっくりパインした後に勉強している花ちゃんをとらえる。

後ろのベッドには博士がいる。

博士、ヘア写真集を見てニヤニヤしている。

花ちゃん、落ち着きがなくなって来る。

頭を左右に振り始める。

博士、写真集を真剣に見ている。

花ちゃんの頭の振りが激しくなる。

花ちゃんの頭から湯気が立ち上る。

花ちゃん頭から湯気を出しながら立ち上がり、歩き始める。

花ちゃん

「…あたま…ばくはつ…あたま…ばくはつ」

花ちゃん、ドアを開けずに破壊して外へ出て行く。

博士、事態に気づいて写真集を投げて立ち上がり、急いで後を追う。

博士

「花ちゃん！待ちなさい」

§一七 研究所・廊下（昼）

タイトル

「第三話・花ちゃんの脳を取り替えるの巻」

頭から湯気を出しながらギクシヤクと廊下を歩く、花ちゃん。

花ちゃん 「…あたま…ばくはつ…あたま…ばくはつ」

後を追う、博士。

博士 「花ちゃん！待ちなさい！」

§一八 研究所・庭（昼）

頭から湯気を出しながらギクシヤクと庭を歩く、花ちゃん。

花ちゃん 「…あたま…ばくはつ…あたま…ばくはつ」

後を追う、博士。

博士 「花ちゃん！待ちなさい！」

花ちゃん、庭の池に飛び込む。

博士 「…やばい！まだ放水テストしてないのに…」

博士が心配そうに駆け寄る。

池に死んだように浮ぶ、花ちゃん。

博士 「大丈夫か？花ちゃん」

花ちゃん、上半身を起こす。

ザリガニが花ちゃんの鼻にハサミでぶら下がっている。

動いている。

花ちゃんの頭の湯気がおさまっている。

花ちゃん 「…あたま…ばくはつ…なおた…」

博士、ほっとする。

花ちゃんの鼻にぶら下がっているザリガニが動く。

花ちゃん、驚いてザリガニを取ろうと両手を激しく動かす。

顔に自分の左手の指が刺さる。

「だめだめ。壊れちゃうよ！」

博士、池に飛び込んで花ちゃんの両手を押える。

「いま取ってあげるからじっとしていなさい」

花ちゃん、顔に指が刺さったままの状態動きを止める。

博士、ザリガニを花ちゃんの顔から取る。

取れたザリガニを花ちゃんに見せる、博士。

博士

「ほら。もう大丈夫だ」
花ちゃん、顔に指を差したまま、じっとザリガ
ニを見る。

§一九 工場街の煙突（夕）

きれいな夕焼け空と煙突の煙。
烏が飛んで行く。烏の鳴き声。

§二〇 ある学習塾・出口（夜）

博士、電柱の陰に隠れて学習塾の出口を見つめ
ている。

学習塾から小学生たちが出て来る。
博士、真剣に品定めする目で見ている。
眼鏡をかけた賢そうな男の子の小学生。
博士の目つきが変わる。

博士

「…賢そうな子だ…」

博士

博士、小学生に急ぎ足で近づく。

博士

「もし」

博士

小学生、「？」と博士を見る。

博士

「テスト！現在の内閣総理大臣の名を述べな

さい！」

博士

小学生、気持ち悪そうに博士をみる。

博士

「現在の内閣総理大臣の名を述べなさい！」

小学生

「ばーか！」

小学生、博士に「あっかんべー」をした後、
走り出す。

追いかける博士。

逃げる、小学生。

§二二 交番のある通り（夜）

逃げる小学生。

追いかける博士。

小学生、振り向いて博士を見た後、交番に飛び
込む。

小学生

「おまわりさん！助けてー！」

博士

急ブレーキをかけて止まる、博士。

博士

「ちきしょう！クソガキめ！」

博士、Uターンして走り出す。

§二二 走る博士の車・車内（深夜）

博士

博士、運転している。

博士

「…こうなったらいきなり捕獲だ」

舗道を歩く一人の男。

博士

博士、男を追抜いてから急ブレーキをかける。

車内から男を見る。

博士

「…うーん。いまいちだが、しょうがない」

アタツシユケースを開ける、博士。

中からライフルを取り出す。

窓ガラスを静かに開けて男に向かってライフルを構える。

男、驚いて手で顔をカバーする。

引き金を引く、博士。麻酔銃の発射音。

男、首を押さえて倒れる。

博士、勢いよく車からとびたし、男に近づいて

行く。

周囲を見回した後、倒れている男の両足を持ち、

引きずるように車に移動する。

§二三 渋谷・飲食街・ゴミ置き場（朝）

大量のゴミ。

カラスがゴミの上のっている。

電車の通過音。

§二四 研究所・研究室（朝）

ベッドに縛りつけられた男。眠っているようだ。

男、あきらかに馬鹿な顔をしている。

男の頭に金属製のボール。そこから無数のコー

ドが出ている。

隣に同じ装置に入っている、花ちゃん。
花ちゃんも眠っている。

博士、パソコンの前に座っている。

キーボードになにやら入力する。

モニターに男の脳の断面図が写し出される。

再びキーボードになにやら入力する、博士。

モニターに男と花ちゃんの脳の断面図が写し出される。

浮かない顔をしている、博士。

モニター画面に「IQ」11 / IQ」12」と

表示される。

博士、頭を抱える。

「よりによつて…また、あんぼんたんとは…ついでない…」

ため息をつく博士。

男、目を開ける。

「（急に喋り出す）ここはどこだ！お前はだれだ！」

「すまんが今考え事してるんでしばらく黙っていてくれ」

男 「なんなんだ。その偉そうな態度は。俺を開放

しろ！このベルトを外せ！」

男、暴れる。頭に付けられた装置が外れる。

さらに激しく暴れる、男。

博士 「現在の内閣総理大臣の名を述べなさい！」

男、急に真顔になる。

博士 「現在の内閣総理大臣の名を述べなさい！」

男、眉間に皺をよせて冷汗を流す。

男 「…ううう…わからない！」

と言つて気絶する。

大きなため息をつく、博士。

＃二五 河原実景（夕）

タイトル 「第四話・花ちゃん対決するの巻」

黄金色に輝く川の水。

鉄橋を電車が通過して行く。

§二六 河原（夕）

博士、意識のない男を背負って河原を歩く。
河原に男を下ろす。

男は麻酔薬でも打たれたのかぐったりしている。

博士、男を見下ろす。

博士

「じゃあね。大馬鹿さん」

博士、土手の方へ歩き始める。

§二七 河原・土手（夕）

博士の黒いライトバンが土手に停車してある。
その車の前に黒いコートの男が立っている。

博士、男に気づいて走り出す。

男の正体は神崎教授。

博士、神崎教授の前で立ち止まる。

博士

「…神崎…」

神崎教授

「…久しぶりだな。二葉亭…」

向き合った二人の映像に以下のナレーション
が超早口に流れる。

N

「二葉亭博士と神崎教授は学生時代の親友だった。しかし、徐々に二人の意見は対立するようになった。二葉亭博士は正義のサイボーグを作ることに命をかけ、神崎教授は悪のサイボーグを作ることに命をかけることになる。そして、二人は永遠のライバルとなったのだった！」

ナレーションが終わると急に動き出す、二人。
神崎教授、不敵な笑みを浮かべる。

神崎教授

「ふふふ…」

博士の額から冷や汗が流れる。

神崎教授、車の中をのぞく。

車内には眠っている花ちゃんがいる。

「これがお前の新作か？」

博士

「花ちゃんだ」

神崎教授 「弱そうな名だ。ははは」
博士 「…なんだと！」

神崎教授、神崎教授の胸倉をつかむ。
神崎教授、軽く博士の手を払う。
ひるむ、博士。

神崎教授、コートからコンパクトな携帯電話を
取り出し、広げる。

電話をする。

神崎教授 「もしもし。私だ。スタンバイOKなら登場し
てくれ」

神崎教授、くるりと向きを変えて土手の先を見
る。

博士も見る。

土手の向こうから砂煙を上げながらドタドタ
と走って来る、サイボーグ黒が見える。

神崎教授 「私の新作。サイボーグ黒だ。なぜなら色が黒
いからだ。ははは」

鼻で笑う、博士。

博士 「ふんっ」

サイボーグ黒、砂煙を上げながら猛スピードで
近づいてくる。

二人の前で急ブレーキ止まる、サイボーグ黒。
激しい砂煙に覆われる画面。

ゆっくり静まる砂煙。

偉そうに立っている、サイボーグ黒。

神崎教授 「サイボーグ黒！お前の実力をみせてやれ！」
黒 「アイアイサ」

サイボーグ黒、ゆっくり博士の車後部に近づく。
重量上げのように両足をひろげ腰を落とす。

車のバンパー部分に手を入れる。

サイボーグ黒、博士を見る。

「車を持ち上げます！アイアイサ」

博士、あわてて車に走りよる。

「起きなさい！花ちゃん！」

黒 「チェストーツ！」

車が一回転して土手下に転落して行く。

ポーズを決めている、サイボーグ黒。
博士、驚いた顔で転がる車を見つめている。

博士
「花ちゃん！」

爆発する車。

神崎教授
「（高らかに笑う）ははは」

サイボーグ黒も真似をして笑う。

博士、爆発する車を放心状態で見つめている。

博士
「花ちゃん！」

がくりと膝をつく、博士。

燃える、車。

神崎教授
「（高らかに笑う）ははは。弱くて相手になら
んわ！ははは」

火の車がガタガタと動く。

その中から花ちゃんがギクシャクと出てくる。

花ちゃん
「ばくはつ！」

ギクシャクと歩き出す、花ちゃん。

博士
「おお！花ちゃん！」

神崎教授
「むむむ！」

花ちゃんが土手を上ってくる。

神崎教授
「サイボーグ黒！あいつをこてんこてんにや
つつけてしまえ！」

黒
「アイアイサ！」

サイボーグ黒、花ちゃんに向かった走り出す。

博士
「（叫ぶ）花ちゃん。そいつはすごく悪い奴だ！

悪い奴はどうする？」

花ちゃん
「わかるい！やつける！わかるい！やつける！」

花ちゃん、ぎこちなく身構える。

サイボーグ黒、花ちゃんに飛びかかる。

花ちゃんの右手がサイボーグ黒の顔を貫通す
る。

黒
「ううっ」

そのまま右手を上上げる、花ちゃん。

花ちゃん
「わかるい！やつける！わかるい！やつける！」

サイボーグ黒の体が持上がり、旗のようになる。

花ちゃん、その姿勢のまま回転し始める。

花ちゃん
「わかるい！やつける！わかるい！やつける！」

「わかるい！やつける！わかるい！やつける！」

花ちゃん
「わかるい！やつける！わかるい！やつける！」

「ぶちっ」という音と共にサイボーグ黒の顔が割れる。

飛んで行く胴体。

川に落ちる。

神崎教授、走って来る。後ろから博士。

川を流れて行くサイボーグ黒の体。

花ちゃん、下に落ちたサイボーグ黒の顔半分を取り上げ、粉々にする。

花ちゃん

「…わるい…やつける…わるい…やつける…」

神崎教授

「くろーっ！」

叫びながら川の前で立ち止まる、神崎教授。

花ちゃん、なおもサイボーグ黒の顔半分を粉々にしている。

花ちゃんの横に立つ、博士。

博士

「花ちゃんのパワーは世界一だ。頭が悪くたってそのパワーがあれば無敵だ！」

花ちゃん、博士を見る。

花ちゃん

「…わるい…しんだ？…」

博士

「ああ。すばらしい戦いだっただよ！花ちゃんが

花ちゃん

「…へいわ…へいわ…」

カメラ、ゆっくりズームバックして行く。

黄金色の夕景の中の花ちゃんと博士、そして神崎教授。

遠くに放置されたままの男。

感動的な音楽。

㊦二八 花巻高校・正門（午後）

タイトル

「第五話・花ちゃん学校するの巻」

花巻高校の全景。ゆっくり雲が動いている。

㊦二九 花巻高校・校長室（午後）

校長の応接椅子に校長先生が座っている。

校長の正面に博士と花ちゃんが並んで座っている。

博士

「この子、ずっとアメリカにいましたので、日本語の発音が少しばかり変なのです」

校長

「そうですか。そうですね。それはすばらしい。

私も LOS ANGELES（ここだけ英語の発

音）の方に三年ばかり住んだことがあります」

博士

「この子はニューヨークです」

校長

「NEW YORK（英語で）？ W O N D E R

F U L ! です」

花ちゃん

「：によく：」

校長、花ちゃんをぽかんと見る。

校長

「：では、英語は大丈夫ですね」

博士

「ええ。英語はペラペラです」

校長

「そうですか。それは W O N D E R F U L ! 」

校長、花ちゃんを見て言葉を待つ。

博士

「：ご挨拶しなさい、花ちゃん」

花ちゃん

「：こんにちは：はじめて：よろしく」

校長

「（少し困って）花田くんは立派な身体してる

から、運動部にでも入ったら、どうかな？」

花ちゃん

「：うど：やる」

校長、立ち上がって窓へ移動し、開ける。

野球部の練習の音が聞こえる。

校長

「うちの野球部は名門なんですよ。春の甲子園

出場二回夏の甲子園出場三回ですわ。五年前の

夏はベスト十六まで行きました」

校長、自分で納得して何度もうなづく。

花ちゃん、立ち上がって校長の横へ移動する。

野球部の練習を見る、花ちゃん。

§三〇 花巻高校・グラウンド（午後）

グラウンドで野球部が練習している。

花ちゃんと校長と博士、校庭の木陰で練習を見ている。

校長

「今、バッターボックスに立っているのが四番

でエースの坂本くんです」

博士、うなづいてあげる。

博士

花ちゃん、ギクシャク歩き出してグラウンドの中に入って行く。

「あ。花ちゃん！だめだよ」

坂本が打つ。カキーンと甲高い音。

ライナー性の打球が歩く花ちゃん向かって飛んで来る。

校長

「危ない！」

身を乗り出す校長と博士。

花ちゃん「はっ」としてボールを見る。

飛んでくる豪球。

心配そうに花ちゃんを見る、部員たち。

飛んでくる豪球。

花ちゃん、人差し指をスルリと前に出す。

花ちゃん

「…たま…とる…」

ボール、花ちゃんの指にささる。

部員たち、驚きのリアクションで花ちゃんを見ている。

校長、啞然として花ちゃんを見ている。

花ちゃん、指にボールを刺したまま部員たちの方へ歩いて行く。

部員たち、少し後ずさりする。

花ちゃん、そのまま投げるアクション。

豪速球。火の玉ボールが飛んで行く。

逃げる、部員たち。

花ちゃんの投げたボールがバックネットにめり込む。

ボール、湯気が出ている。

啞然としている部員たち。

坂本が花ちゃんを強く睨んでいる。

ネット裏から姿を表す、野球部監督。

監督、花ちゃんに真っ直ぐ向かって歩いてくる。

花ちゃん、立っている。

花ちゃんの前で立ち止まる、監督。

「すごい球を投げるじゃないか！」

監督

校長、笑いながら監督と花ちゃんに近づいて行く。

校長 「フロムNYの花田君です」

監督、校長を見る。

監督 「ニューヨーク？」

花ちゃん 「…によく…」

校長、二人の前まで移動して立ち止まる。

監督 「…本場のベースボール…」

校長 「すばらしい。是非とも野球部に入りなさい。

花田くん！」

花ちゃん 「…やきぶ…やる…」

校長 「（嬉しそうに）そうか？かるか！」

監督 「私が君を甲子園の星にしてみせよう！」

監督の体が燃えている。

バットを持った坂本が叫ぶ。

坂本 「監督！坂巻高校のエースはこの俺です！こ

こでそいつと勝負させてください！俺がエー

スであることを証明してみせます！」

野球部員たちが歓声を上げる。

監督、振り向いて坂本を見る。

坂本の体が燃えている。

§三三 花巻高校・全景（夕）

校舎の全景。影が長くなっている。

チャイムの音が響く。

§三三 花巻高校・グラウンド（夕）

マウンドにグローブをつけた花ちゃんが立っ
ている。

バッターボックスには坂本。

対決を見守る、監督の顔。

対決を見守る、校長の顔。

対決を見守る、博士の顔。

対決を見守る、部員たち。

花ちゃん 「（ボールを見せて）…なげる？…」

花ちゃん、博士の方を見て質問する。

博士、大きくうなづく。

博士 「そらだよ。そのボールを投げるんだ。花ちゃん」

構えている、坂本。

花ちゃん 「…なげる…」

と言つていきなりモーションなしで投げる。

豪速球が坂本の顔に向かって飛んで行く。

坂本、尻もちをついて倒れる。

ボール、大リーグボール1号のようによけたバットに当たる。

坂本 「うっ！」

坂本、バットを思わず離す。

ボールが金属バットにめり込んでそのままバツクネットに当たる。

驚く、監督の顔。

驚く、校長の顔。

驚く、博士の顔。

驚く、部員たち。

花ちゃん 「…なげる…」

花ちゃん、グラウンドに転がっているボールを拾つてそのまま無造作に投げる。

花ちゃんの投げた豪速球がバットを持たない

坂本に向かって飛んで行く。

坂本、悲鳴をあげて逃げる。

バツクネットにつき刺さる、ボール。

花ちゃん 「…なげる…」

花ちゃん、さらにグラウンドに転がっている

ボールを拾つてそのまま無造作に投げる。

坂本に向かって飛んで行く、ボール。

「ひえっ！殺される！」

坂本、悲鳴をあげて逃げ回る。

バツクネットにつき刺さる、ボール。

部員たちが乱闘のように花ちゃんに向かって駆け寄る。

「花田くん、いつたいどうしたのでしょうか？」

校長 「アメリカと日本はルールが違いますので」

校長、博士を見る。

校長
監督

「なるほど」
「何を寝ぼけたことを！」

監督も花ちゃんに向かって走り出す。

部員たちが全員で花ちゃんを押えつける。

監督も一緒になって押える。

「君の実力はわかった。もう終わりだ」

ぶるぶる震えている、坂本。

坂本

「……ボール怖い……ボール怖い……」

花ちゃん、押えつけられた両手足を一斉に動かす。

押えつけていた部員たちと監督が全員が飛ば

される。

監督

「うおおっ」

部員たち

「ぎゃー」

花ちゃん、ボールを探してとぼとぼ歩き出す。

花ちゃん

「……なげる……」

博士

博士、花ちゃんに駆け寄る。

「花ちゃん！もうやめなさい！」

花ちゃん、立ち止まって博士を見る。

花ちゃん

「……なげる……？なげない……？」

博士

「投げない！」

花ちゃん

「……なげない……？」

博士

「投げない！もう終わり」

周囲を見回す、花ちゃん。

転がっているバットを発見する。

バットに向かってトボトボと歩き出す。

花ちゃん、バットを手に取る。

花ちゃん

「……うつ……？」

博士に聞く。

博士

「打たない！もう終わり。帰るよ」

花ちゃん、バットを持ったまま考えている。

花ちゃん

「……かえる……？」

博士

「（強く）帰る！」

しよんぼりする、花ちゃん。

ぶるぶる震えて続けている、坂本。

坂本

「……ボール怖い……ボール怖い……」

投げ飛ばされた監督、腰を強打したよで腰をおさえてうなっている。

投げ飛ばされた部員たちもそれぞれうなっている。

校長

「さすが本場アメリカの野球は格闘技だ」
校長、一人うなづいて納得している。

§三三三 海（夕）

タイトル

「第六話・花ちゃんハンバーグするの巻」

夕日が海を染めている。

カモメが飛んで行く。

§三四 研究所・研究室（夜）

暗い室内。

ドアを開けて入ってくる、博士。室内灯のスイッチをオンする、博士。

後ろに花ちゃん。

博士、室内へ入って行く。

留守番電話の前へ移動して「留守」を解除する。

留守電の声「三件です。：神崎だ。このまえばよくもサイ

イボーグ黒を壊してくれたな。仕返しは必ずさせてもらうぞ。憶えてろ！：一件です。：神崎だ。すごいサイボーグが完成する。お前のボロサイボーグをこっぴみじんだ！ははは。：二件です。：神崎だ。：新サイボグの名前を発表する。いいか。耳の穴かっぼじってよく聞け。サイボーグ白だ！ははは。三件です」

博士、机の上の書類を整理しながら無関心そこに留守番電話を聞いている。

花ちゃん、博士の前の椅子におとなしく座っている。

博士

「：相変わらずバカなやつだ…」

花ちゃん

「：ばか…やつ…」

博士、花ちゃんを見て笑う。

博士

「晩ご飯なしでしょうか？花ちゃん」

花ちゃん 「…はんばぐ…」

博士 「またかい？今夜は刺身とか大人のおかずにしよう」

花ちゃん 「…や…さしみ…や…くさい…」

博士、困っている。

博士 「うーん」

§三五 研究所・台所（夜）

博士、座ってボールに入っているハンバーグの具をこねている。

花ちゃん、隣に座って見ている。

ボールに手を伸ばし具を取ろうとする、花ちゃん。

博士 「あ。花ちゃんはやらなていいよ…」

花ちゃんの手が貫通してボールに穴が開く。

テーブルに手が刺さる。

花ちゃん 「…ささた…」

博士 「（叱る）花ちゃん！」

博士、花ちゃんをそのままにしてハンバーグをこね続ける。

花ちゃん、手を抜こうとする。

博士 「だめ。そのままじっとしていなさい！」

花ちゃん、動きを止めてじっとする。

花ちゃん 「…じつ…」

§三六 研究所・和室（夜）

渋い和室。八畳間。アナログなテレビ。テレビではNHK教育「今日の健康」が流れている。ちゃぶ台を囲み、正座している博士と花ちゃん。おかずはハンバーグとサラダと味噌汁。

花ちゃんの食器は全て金属製のもの。

博士の前にはビール瓶とコップ。

博士、手を合せて。

博士 「いただきます」

花ちゃん、真似をして手を合せる。

花ちゃん
「……いた……ます……」

博士
「さあ、食べよう」
博士、ビールのコップを抜き、コップにビールを注ぐ。

花ちゃん、じつと博士の手元を見ている。
博士、花ちゃんの視線に気づいて見る。

博士
「飲みたいのか？花ちゃん」

花ちゃん
「……のむ……」

博士
「じゃあ。ちよつとだけだよ」

博士、花ちゃんの前の金属製のコップにビールを注ぐ。

博士、コップを取って軽く乾杯の動作。

博士
「乾杯」

花ちゃん、コップを取る。

花ちゃん
「……かぱい……」

博士、ビールをうまそうに飲む。

花ちゃんも真似して飲む。

ビールを飲み干してコップをテーブルに置く、
博士。

同じようにビールを飲み干してコップをテーブルに置く、花ちゃん。

博士、驚いた顔で花ちゃんのコップの中をのぞき込む。

博士
「いけるねえ、花ちゃん。うまいかい？ビール」

花ちゃん、首を傾げる。

花ちゃん
「？」

博士、にやにやして花ちゃんのコップにビールを注ぐ。今度はコップいっぱいまで。

花ちゃん、コップを取ってまたビールを一気に飲む。

§三七 住宅街・俯瞰図（夜）

住宅街の全景。家々の窓に灯りがついている。
犬の遠吠え。

三三八 研究所・花ちゃんの部屋（夜）

花ちゃん、顔を真っ赤にしてベットで仰向けになつてゐる。花ちゃんの目、くるくる回る。回つてゐる。

花ちゃんの椅子に座つて心配そうに見ている、博士。

博士 「大丈夫かい？花ちゃん。調子にのつて飲ませすぎた……」

花ちゃん 「……まわる……まわる……」

突然、窓ガラスが割れる。

博士、「はっ」として窓を見る。

割れた窓から乱入して来る、神崎教授。

神崎教授 「（甲高く笑つて）ははは……」

博士 「……神崎っ……」

博士、立ち上がつる。

神崎教授 「俺は天才だから仕事が早いんだ！」

博士 「なにが言いたいんだ？」

博士、じわじわ花ちゃんの方へ移動する。

神崎教授 「完成したんだよ。史上最強のサイボーグ白がな！」

神崎教授が台詞を言い終わると急に二人、動きを止める。以下のナレーションが超早口に流れる。

N 「二葉亭博士と神崎教授は学生時代の親友だ

つた。しかし、徐々に二人の意見は対立するようになった。二葉亭博士は正義のサイボーグを作ることに命をかけ、神崎教授は悪のサイボーグを作ることに命をかけることになる。そして、二人は永遠のライバルとなったのだつた！」

ナレーションが終わると急に動き出す、二人。博士、花ちゃんを見る。

花ちゃん、相変わらず目をくるくるさせてのびている。

神崎教授 「カモンだ！サイボーグ白！」

白

博士、花ちゃんを抱きかかえる。

部屋の壁を破壊して登場する、サイボーグ白。

「ガオー！」

ポーズを決める、サイボーグ白。

博士、花ちゃんを抱えたまま逃げるように部屋を出る。

神崎教授

「逃げるのか！臆病者！」

神崎教授、サイボーグ白に「一緒に来い！」とジェスチャーする。

神崎教授とサイボーグ白、後を追う。

§三九 研究所・廊下（夜）

タイトル

「第七話・花ちゃん目がまわるの巻」

花ちゃんを抱いて懸命に逃げる、博士。

花ちゃん

「まわる…まわる…」

神崎教授とサイボーグ白がどたどたと追いかけてくる。

神崎教授

「まてーっ！」

サイボーグ白、不必要に廊下の壁をパンチで破壊しながら走っている。

§四〇 研究所・車庫（夜）

博士、車庫に停車してある白いバンの後部座席に花ちゃんを乗せている。

花ちゃん

「まわる…まわる…」

神崎教授とサイボーグ白がどたどたと現れる。

神崎教授

「まてーっ！」

サイボーグ白、不必要に倉庫の壁をパンチで破壊する。

大急ぎで運転席に乗り込む、博士。

阻止しようと神崎教授が運転席のドアを押さえる。

エンジンを始動させる、博士。

神崎教授

「白！車を破壊しなさい！」

倉庫の壁を破壊していたサイボーグ白、手を止

白

めて神崎教授を見る。
「ガオー！」

ポーズする、サイボーグ白。
車のフロントへ移動して破壊しようとする大きな動作。

神崎教授は必死に運転席から博士を引きずり降ろそうとしている。

車を急発進させる、博士。

神崎教授、引きずられる。

サイボーグ白、大きく空振りして床を破壊する。

§四一 通り（夜）

走る博士の白いバン。必死にしがみつき、引きずられて行く神崎教授。

博士、強くドアを閉める。

挟まれる、神崎教授の手。

神崎教授

「ぎゃあ！」

思わず手を離して路上に転がる、神崎教授。

猛スピードでタイヤを軋ませながら走り去る、博士の車。

§四二 埠頭の夜景（夜）

埠頭の夜景。遠くに東京都心の夜景が見える。
ポンポン船の通過音。

§四三 埠頭の駐車場（夜）

ガランとした駐車場。

博士の白いバンが停車している。

車内。

博士、後部座席に身を乗り出して花ちゃんを見る。

花ちゃん、寝息をたててスヤスヤと眠っている。

§四四 研究所・研究室（夜）

博士の席に座る、神崎教授。

サイボーグ白、不必要に壁を破壊している。

神崎教授、博士の書類を盗み見ている。

神崎教授 「腹減らないか？白」

サイボーグ白、破壊する手を休めて神崎教授を見る。

白 「（大きくうなづく）減った。腹、減った。

飯喰わせる！ガオー」

神崎教授

「私は手が離せないので台所に行って食い物を探して来てくれ」

白 一間考えた後、大きくうなづく、サイボーグ白。

「腹減った。飯喰わせる。ガオー」

を繰り返しながら部屋から出て行く。

§四五 埠頭（夜）

埠頭に立つ、博士。

腕時計を見る。

後ろから花ちゃんがふらふらしながら歩いてくる。

振り向く、博士。

博士 「花ちゃん」

花ちゃん、ふらふらと博士に近づく。

花ちゃん 「…きも…わる…」

§四六 研究所・研究室（夜）

研究室のテーブルにビールとつまみが並んでいる。

乾杯する、神崎教授とサイボーグ白。

神崎教授 「とりあえず、おつかれ」

白 「おかれさま！ガオー」

一気に飲み干す、二人。

神崎教授 「うう。うめえ！」

白 「うまいガオー」

同時にコップを置く、二人。

サイボーグ白、瓶を取り神崎教授のコップにピ

ールを注ぐ。

§四七 埠頭（夜）

海にゲロを吐く、花ちゃん。

背中を擦って介抱する、博士。

博士 「大丈夫かい。花ちゃん」

花ちゃん 「…きも…わる…」

心配そうに花ちゃんを見る、博士。

§四八 研究所・研究室（夜）

神崎教授とサイボーグ白、それぞれビール瓶を
らっぱ飲みしている。

二人とも顔が赤い。

神崎教授のビール空のようだ。瓶を振る、神崎
教授。

神崎教授 「ビール！」

白 「もう全部飲んだガオー！」

神崎教授 「なにつ！」

神崎教授、瓶をカ一杯壁に投げつける。

割れる瓶。

嬉しそうにするはしゃぐ、サイボーグ白。

白 「ガオー」

サイボーグ白も真似して瓶を投げる。

神崎教授、立ち上がってテーブルをひっくり返
す。

神崎教授 「白！この家、全部ぶっ壊すぞ！」

白 「壊すガオー！」

サイボーグ白、戦闘ポーズをした後にどんだん
破壊して行く。

神崎教授も書類を片っ端から破り捨てる。

神崎教授 「（甲高く笑う）ははは…」

サイボーグ白、コンピューターの前に立って
破壊しようとする。

神崎教授 「あ！駄目。それは駄目！」

破壊する手を止めて振り向く、サイボーグ白。

神崎教授 「…それは…もったいないから、もらって帰るんだよ」

サイボーグ白、納得いかない顔で別のマシンへ移動する。

サイボーグ白、別のマシンを破壊しようとする。

神崎教授 「あ！それも…。もったいない！もらって帰ろう！」

サイボーグ白、破壊する手を止める。

白 「（怒って）じゃあ、どれ壊すの？え？壊すものねえじゃんか。さっき全部ぶっ壊すって言ったじゃねえかよ！」

ふてくされて、床に転がる、サイボーグ白。

白 「だいたい貧乏くせえんだよ。ったく」

神崎教授、早足に近づいて来てサイボーグ白の腹に蹴りを入れる。

神崎教授 「だれに向かって言ってるんだ！白！」

サイボーグ白、蹴られた腹を押えて神崎教授を睨む。

神崎教授 「親にむかってなんだ、その目つきは！」

サイボーグ白、素速く立ち上がる。

白 「てめえなんか親でもなんでもねえ！ハゲ野郎！」

サイボーグ白、神崎教授を殴る。

神崎教授の体が飛ぶ。

神崎教授 「うっ」

背中を激しく壁に打ちつけられる。

♀四九 走る車・車内（夜）

タイトル 「第八話・花ちゃん危機一発の巻」

運転する、博士。助手席に花ちゃん。

カーステレオから「じゃじゃまる・ピッコロ」のテーマ曲が流れている。

花ちゃん、跡切れ跡切れに一緒に唄っている。

博士、笑って花ちゃんを見る。

花ちゃん、跡切れ跡切れに一緒に唄い続けてい

る。

§50 研究所・研究室（夜）

神崎教授、倒れている。

神崎教授 「（痛そうに）ううう…」

サイボーグ白、立ち尽くしている。

白 「（ぶつきらぼうに）…ごめん…ガオー」

神崎教授 「うう…」

サイボーグ白、神崎教授に近づきのぞき込む。

白 「ごめんなさい。ガオー。パパ」

神崎教授 「…ちよつと…起こしてくれ…」

サイボーグ白、神崎教授を抱きかかえる。

神崎教授 「…ベッドで横になりたい…」

白 「…ガオー…」

サイボーグ白、神崎教授を抱えたまま歩き出して部屋を出て行く。

§51 研究所・車庫（夜）

車庫に停車する博士のワゴン車。

車から降りる、博士と花ちゃん。

花ちゃん、眠そうに目を擦る。

§52 研究所・研究室（夜）

破壊されている、研究室。

博士、驚いて立ち尽くしている。

後ろに花ちゃん。

花ちゃん 「…どう…した？…」

博士 「か…神崎…！」

博士、鬼のように険しい顔に変わる。

サイボーグ白が無警戒に入ってくる。

花ちゃん、振り向いてサイボーグ白と目が合う。

博士は気づかず立ち尽くしたまま。

サイボーグ白、あわててリターンして消える。

花ちゃん 「…だれだ？…」

博士

博士、振り向く。

「花ちゃん。どうした？」

花ちゃん、サイボーグ白の逃げた方向を指し示す。

花ちゃん

「…だれ?…」

博士

「?…まだいるのか?」

博士、入口に駆け寄り、外を見る。

博士

「花ちゃん!行くぞ」

博士、出て行く。

花ちゃんもギクシヤクと出て行く。

§五三 研究所・廊下（夜）

神崎教授たちを探しながら急ぎ足で歩く、博士。廊下の壁も破壊されている。

花ちゃん、ギクシヤクとついでに行く。

廊下の奥で戦闘ポーズして立っている、サイボーグ白。

博士

「花ちゃん。あいつは悪い奴だ。悪い奴はどうする?」

花ちゃん

「…わるい…やつける…」

花ちゃん、両手伸ばしてサイボーグ白に向かって歩き出す。

サイボーグ白、花ちゃんに向かって走る。

花ちゃんにリアアトするサイボーグ白。

リアアトがきれい決まって倒れる、花ちゃん。

花ちゃん

「…あ…」

心配そうに見ている、博士。

サイボーグ白、素速く花ちゃんの左腕を取って脇固めを決める。

花ちゃん

「…いたい…」

心配そうに見ている、博士。

サイボーグ白、力いっぱい花ちゃんの腕を持ち上げる。

花ちゃん

「…いたい…」

博士

「…花ちゃん…」

サイボーグ白、さらに力いっぱい花ちゃんの腕を持ち上げる。
ボキッという音と共に花ちゃんの左腕がもげる。

サイボーグ白、素速く花ちゃんの両足をつかんで海老固めを決める。

花ちゃん、潤んだ目で博士に助けを求めている。

博士

「花ちゃん……」

博士、周囲を見回し、破壊された廊下壁の鉄骨を手にする。

鉄骨を持ってサイボーグ白に向かって走る、博士。

サイボーグ白、気配に気づいて振り向く。

博士、鉄骨で殴りかかる。

サイボーグ白、花ちゃんの足から手を離して博士にカウンターパンチを決める。

博士、飛ばされる。

バタリと気絶する博士。

花ちゃん、サイボーグ白が手を離れたすきに立ち上がるようにする。

サイボーグ白、再び両足を取り、海老固めを決める。

同じ体勢に戻る、花ちゃん。

花ちゃん

「はか……せ……」

花ちゃんの目線の先に気絶している、博士。

花ちゃん、足を強く戻そうとする。

サイボーグ白の体が花ちゃんの足力で戻されて行く。

床に頭を強く打つ、サイボーグ白。

花ちゃん、ゆっくりと立ち上がる。

花ちゃん

「……わるい……やつける……」

サイボーグ白、頭を左右に揺すっている。

花ちゃん、右手を前に突き出してサイボーグ白の胴体に突進する。

花ちゃんの腕がサイボーグ白の胴体を貫通する。

そのままサイボーグ白を持ち上げて壁から露出した鉄骨に頭を何度も打ちつける。
サイボーグ白の頭が割れて行く。
「ぼきっ」と鈍い音がする。
サイボーグ白の首が折れて床に落ちる。
転がるサイボーグ白の頭。
花ちゃん、胴体をさしたままサイボーグ白の頭を足で踏みつける。
「ぐちゃ」と潰れる頭。

§五四 研究所・博士の寝室（夜）

片手で気絶している博士をかかえてベットの前に移動する、花ちゃん。
ベットでは神崎教授が静かに眠っている。
花ちゃん、その横に博士を寝かせる。
「：なかよし？：」
仲良く並ぶ、博士と神崎教授。

§五五 花巻高校・廊下（昼）

タイトル 「第九話・花ちゃん番長するの巻」
廊下をギクシヤクと歩く、花ちゃん。
反対方向から不良三人組（番長と山田と加藤）が肩で風を切って歩いてくる。
歩行中の男子生徒、立ち止まって直立する。
「おはようございます！」
偉そうに歩き続ける番長たち。
花ちゃん、番長たちの横をギクシヤクと通過して行く。
番長たち、立ち止まって文句がありそうな顔で振り向く。
山田 「おいおい。またんかい」
花ちゃん、ギクシヤクと歩き続ける。
加藤、足早に花ちゃんを追う。
「待てよ！おい」
加藤、花ちゃんの肩に手をかける。

花ちゃん、立ち止まって振り向く。
「……？」

首を傾げる。

加藤 「番長様に挨拶なしかい？いい度胸してんな」
花ちゃん 「……はんちう……？」

加藤、花ちゃんを睨みつける。

加藤 「ふざれてんのか？てめえ」

番長と山田、花ちゃんの所に移動してくる。

番長 「見かけねえ顔だな。転校生か……？」

花ちゃん 「……はじめ……」

全員 「あ……」

花ちゃん 「……よろしく……」

全員 「あ……」

「なんだ。こいつと」と花ちゃんをじろじろと見る番長たち。

番長 「……面白いじゃねえか。可愛がってやろうか」

山田と加藤、不敵な笑いを浮かべる。

花ちゃん 「……おもしろ……」

番長 「おう。裏庭行くぞ！」

山田と加藤、それぞれ花ちゃんの腕をつかむ。

山田・加藤 「ちよっと顔かしてくんな」

花ちゃん、首を傾げる。

§五六 花巻高校・裏庭（昼）

花ちゃん、番長たちに囲まれている。

山田、学生服の内ポケットからドスを出す。

にやにや笑って花ちゃんドスを見せる、山田。

花ちゃん、手を伸ばして無造作にドスを握る。

山田、驚いて動けない。

同じように驚いている番長と加藤。

花ちゃん、片手でドスを曲げてしまう。

思わず手を離す、山田。

山田 「ああ……」

啞然としている、番長と加藤。

加藤 「な、なんなんだ。こいつ……」

花ちゃん 対応に困っている、番長。
花ちゃん、曲ったドスを番長に見せる。
「まがた……」

番長、後退する。

前進する、花ちゃん。

後退する、番長。番長の顔から冷や汗が流れる。
茫然と立ち尽くしている、山田と加藤。

前進する、花ちゃん。

後退する、番長。フェンスに追い詰められる。

番長の顔に自分の顔を近づける、花ちゃん。

番長 「ききよ……今日はこのへんで許して……やるから……とつとと……うせな……よ」

加藤 「どりゃあ！」

角材を振り上げた加藤が花ちゃんの後ろに走り寄り、殴りつける。

角材、見事に折れる。

ゆっくり振り向く、花ちゃん。

花ちゃん 「……どした？……」

折れて短かくなった角材を持って困っている、加藤。

そのすきに番長、花ちゃんの顔を殴る。

花ちゃん、ふらりとする。

番長、殴った自分の手を痛そうにおさえて膝をつく。

番長 「痛ててて！」

花ちゃん、殴られた顔を押える。

花ちゃん 「……いたい……？」

番長、自分の手を見ている。骨折したようになりとしている番長の右手。

番長 「……いてえよ……」

番長、泣いている。

山田、急に走って逃げ出す。

加藤 「おい。待てよ！」

加藤、自分も逃げようか迷っている。

花ちゃん、一回転して加藤を見る。

加藤、ぶるぶる震える。
加藤に向かつて歩き出す、花ちゃん。
逃げ出す、加藤。

花ちゃん
「…どした？…」

逃げる、加藤。

ギクシヤクと追う、花ちゃん。

加藤、大きな石につまづいて転ぶ。

加藤
「あつ！」

同じ石につまづいて転ぶ、花ちゃん。

手を伸ばしたまま加藤の上に転ぶ、花ちゃん。

花ちゃんの手が加藤の背中に刺さる。

加藤
「あぎゃーっ！」

背中に刺さったままの体勢で止まる、花ちゃん。

花ちゃん
「…ささた…」

※五七 花巻高校・全景（夕）

校舎の全景。影が長くなっている。

救急車の音が響く。

※五八 花巻高校・正門前（夕）

学生鞆を持った花ちゃんが学校を出て行く。

番長の声
「花田さん！」

振り向く、花ちゃん。

後ろから番長が走ってくる。右手に包帯。

花ちゃん
「…？…」

花ちゃんの足下で土下座する、番長。

番長
「…花田さん。私をあなたの弟子にしてください」

「！お願いします！」

花ちゃん
「…でし…？」

番長
「お願いします！」

花ちゃん、首を傾げる。

※五九 商店街・ファーストフード店の前（夕）

商店街を歩く、花ちゃん。
後ろから番長がついて来る。花ちゃんの鞆を持
っている。

ファーストフード店がある。

番長、店を見る。

番長 「お腹空かないですか？花田さん。自分、おごる
つす！」

花ちゃん 「：はんばぐ：」

番長 「ハンバーガーです」

花ちゃん 「：はんばが？：」

番長 「はい！ハンバーガーです」

花ちゃん 「：はんばが：」

番長 「行きましょう！」

番長、店に入っていく。

花ちゃんも後について行く。

第六〇 ファーストフード店・店内（夕）

販売カウンターの前に立つ、花ちゃんと番長。
カウンター内には制服を着た女子校生アルバイ
トの美里さんが立っている。

美里さん 「（笑顔で）いらっしやいませ！」

番長、メニューを見る。

番長 「花田さん。なににしますか？」

花ちゃん、じつと美里さんを見つめている。

花ちゃんの頬が赤くなっている。

番長 「どうしたんですか？花田さん。顔が赤いす
よ」

花ちゃんの黒目がハートになる。

美里さんを指差しながら前へ進む、花ちゃん。

花ちゃん 「：すき：」

美里さん、対応に困っている。

番長 「（笑って）一目惚れですか〜！」

花ちゃん 「：すき：？」

美里さん 「はい？（困っている）」

花ちゃん、カウンターをギクシャク乗り越えて

中へ入ろうとする。

店長が駆け寄ってくる。

店長

「お客さん。困ります」

店長、花ちゃんをカウンターから降ろそうとする。

偶然、花ちゃんの指が店長の顔に刺さる。

店長

「うっ！」

美里さん

「（悲鳴）」

逃げる、美里さん。

番長、嬉しそうに笑っている。

番長

「花田さん！かっこいい！」

花ちゃん

「ささた……」

花ちゃん、指を店長の顔から抜く。

そのまま気絶して後ろに倒れる、店長。

若い店員が走ってくる。

若い店員

「け……警察、呼びますよ……！」

周囲のざわめきが増して行く。

番長

番長、周囲を見回す。

「……やばいです。逃げましょう！花田さん」

番長、花ちゃんの手を引っぱって走り出す。

花ちゃん、後ろ向きのままふらふらしながら引きづられて行く。

§六二 工場街（夕）

タイトル

「第十話・花ちゃん恋をするの巻」

石油コンビナートが立ち並ぶ工場街。

煙突からもくもく煙が出ている。

§六二 下町の住宅街（夜）

古い一軒家が立ち並ぶ。

道幅は狭く、車一台分程度。

歩いて来る神崎教授とサイボーグ金。

神崎教授、手に地図を持ってキョロキョロしている。

表札。「二葉亭」と書いてある。

その家の前で立ち止まる、神崎教授。

神崎教授 「あ。ここだ。ここだ」

金 「貧乏そうな家だすな」

※六三 二葉亭家・玄関先（夜）

神崎教授、玄関前に立って呼び鈴を押す。

隣りにサイボーグ金。

しばらく待つ、二人。

反応がない。室内灯は点いている。

再び、呼び鈴を押す。

しばらく待つ、二人。

反応がない。

神崎教授、戸を開けてみる。開く。

神崎教授 「…なんだ。開いてるじゃないか」

※六四 二葉亭家・廊下（夜）

土足で上がる、二人。

室内に進んで行く、二人。

茶の間からTVの音。

茶の間の前で立ち止まる、二人。

中をのぞき見る、二人。

※六五 二葉亭家・茶の間（夜）

爺さんと婆さんがこたつに入ってせんべいを
食べながら仲良くテレビを見ている。

神崎教授とサイボーグ金がどかどか入って
くる。

爺さんと婆さん、気づかずテレビを見続けてい
る。

神崎教授 「（怒鳴る）おい！爺さん婆さん！こつちを見
ろ！」

爺さんと婆さん、一斉に振り向き、神崎教授を
不思議そうに見る。

婆さん 「あら…どちらさんですかいのう？」

神崎教授 「確認する！お前らは史上最低の学者・二葉亭の親だな？」

爺さん 「爺さんと婆さん、顔を見合せる。」

爺さん 「四郎のことを言ってるんじゃないかい？

この方は？」

婆さん 「そのようですね。」

神崎教授とサイボーグ金、いらいらしている。

金 「うー。とろくてイライラするだす！ちよっと

暴れていいですか？」

神崎教授 「確認済みだ。よし暴れる！」

金 「うおーっ！」

こたつをひっくり返す、サイボーグ金。

はじめて恐れる、爺さんと婆さん。

第六六 研究所・研究室（夜）

パソコンの前に座ってなにやらデータを入力している、博士。

花ちゃんはいない。

電話が鳴る。

黒電話を取る、博士。

博士 「はい。二葉亭ですが……」

画面の右上に丸い別画面が登場。その中に電話する神崎教授の顔がある。

神崎教授 「（甲高く笑う）ははは。俺はお前と違って天才だから仕事が早いのだ！」

博士 「……神崎！」

神崎教授 「俺の新作はすごいぞ。サイボーグ金だ！純金だ！ははは」

博士 「切るぞ」

博士、電話を切る。

同時に丸い別画面も消える。

切ったら同時に電話が鳴る。

一瞬躊躇した後、受話器を取る、博士。

博士 「……もしももし……」

再び丸い画面が現れる。神崎教授の顔。

神崎教授 「切るな！大事なことを伝えるぞ！驚くな！お前の親を捕獲した！男と女、両方だ！」

博士 「なな、なんだと？！」

神崎教授 「今、代るぞ！…おい婆さん電話に出る！息子だぞ」

丸い画面から神崎教授が消えて婆さんに代る。

婆さん 「…もしもし…四郎かい？」

博士 「ママ！大丈夫？」

婆さん 「お前は元気かい？」

博士 「俺のことなんかどうでもいいんだよ。そいつはとつても悪いやつなんだよ！」

婆さん 「そうみたいだね。…あつ！」

丸い画面から突然、婆さんが消える。

博士 「…もしもし！もしもし！ママ！」

丸い画面に再び神崎教授が現れる。

神崎教授 「今すぐお前のあほサイボーグを連れてここへ来い！さもないとお前の親はかなりひどい目に遭うぞ！タイムリミットは一時間だ！一分でもオーバーしたらお前の親は本当にかなりひどい目だ！ははは…」

※六七 二葉亭家・茶の間（夜）

立ってポーズを決めている、サイボーグ金。

金 「俺が史上最強のサイボーグであることを証明するだす！うおーっ！」

サイボーグ金、テレビを叩き壊す。

爺・婆 「ひいっ！」

※六八 研究所・花ちゃんの部屋（夜）

激しくドアを開けて入ってくる、博士。

博士 「花ちゃん！大変だ！」

花ちゃん、部屋の奥で寂しそうに膝を抱えて座っている。

室内灯は消えていて薄暗い。

博士、室内灯を点ける。

博士、花ちゃんに近づく。
「花ちゃん！」

博士、花ちゃんの肩を叩く。
ゆっくり振り向く、花ちゃん。

黒目がハートになったまま。
「どうしんだ？その目は！」

ハートの目で博士を空ろに見つめる、花ちゃん。

花ちゃん「：すき：」

博士「：好き？：誰か女の人を好きになったのか
い？花ちゃん！」

花ちゃん、博士をじっと見つめた後、コクリと
首を縦に振る。

博士、頭を抱える。

博士「駄目駄目駄目！君は恋愛をしたら駄目なん
だ！どんだんパワーが減退して普通の人間に
なってしまうのだよ！恋愛は絶対禁止！」

博士、頭を抱える。

花ちゃん、キョトンとハートの目で博士を見て
いる。

博士、強く花ちゃんの手を引く。

花ちゃん、いつもより軽くふわっと体が浮く。

花ちゃん、博士に引っ張られて出入口へ移動す
る。

博士「時間がない！」

第六九 二葉亭家・茶の間（夜）

タイトル「第十一話・花ちゃん恋愛ウイルスの巻」

茶の間が廃墟のごとく破壊されている。

ロープで縛られている、爺さんと婆さん。

タバコをふかしている、神崎教授。

サイボーグ金、ポーズをとっている。

金「うおーっ！もう壊すものがないです！」

神崎教授、腕時計を見る。

神崎教授「遅いなあ……」

サイボーグ金、神崎教授に近づき、横に座る。

金 「パパ。腹減ったです」

神崎教授、怪訝な表情でサイボーグ金を見る。

神崎教授 「エネルギーを無駄に使いすぎなんだよ！ち

よつとは考える！」

金 「すみません。でも腹減ったです」

神崎教授 「台所に行って自分で探しなさい」

金 「ういつす」

サイボーグ金、茶の間を出て行く。

＃七〇 二葉亭家・台所（夜）

サイボーグ金、入ってくる。

冷蔵庫へ移動して開ける。

冷蔵庫に手を突っ込んで次々と食品を出して床に並べる。

秋刀魚、梅干、塩辛、らっきよ、きゅうり、トマト、ニンジン、用命酒、梅酒などなど。

床に並べた食品をみてじっとしている、サイボーグ金。

金 「くそー！肉がないっ！肉肉肉！」

＃七一 走る車・車内（夜）

運転する、博士。助手席に花ちゃん。

花ちゃん、相変わらず目がハート。

博士 「花ちゃん。悪い奴はどうす？」

花ちゃん、答えず空ろな目で前を見ている。

博士、心配さうに花ちゃんを見る。

博士 「…恐ろしい。確実に恋愛ウイルスが体を蝕んでいる…」

空ろな、花ちゃん。

＃七二 走る車（夜）

少し濡れた路面。歩行者信号が道路に写り込んでいる。

水しぶきを上げて通過する、博士の金色のバン。

＃七三 二葉亭家・台所（夜）

サイボーグ金、焼けクソで秋刀魚、梅干、塩辛、らっきよ、きゅうり、トマト、ニンジン、用命酒、梅酒などを食べまくっている。

我にかえり、動きが止まる、サイボーグ金。

金

「喰った気がしないです！」
サイボーグ金、泣いている。

＃七四 二葉亭家・前（夜）

走ってくる、博士のバン。急ブレーキで止まる。
博士、スピーディーにドアを開けて降りてくる。
腕時計を見ながら。博士、スピーディーにドアを開けて降りてくる。腕時計を見ながら。
回り込み、助手席のドアを開ける。

博士

「花ちゃん！着いたよ！」

博士

花ちゃん、空ろな目で博士を見る。

博士

「（怒鳴る）花ちゃん！」

花ちゃん、少しぴくりとする。

無理に花ちゃんを車から降ろす、博士。

花ちゃん、ふらふらしながら降りる。

博士、花ちゃんを引っ張って家の中に入れて行く。

＃七五 二葉亭家・廊下（夜）

博士、花ちゃんを引っ張って廊下を走る。

＃七六 二葉亭家・茶の間（夜）

茶の間に入ってくる、博士と花ちゃん。

神崎教授、気づいて素速く立ち上がる。

腕時計を見る。サイボーグ金はいない。

神崎教授

「…間一髪セーフってどこか…」

縛りつけられた爺さんと婆さん。

博士、縛りつけられた両親を見て驚く。

博士

「パパ！ママ！」

神崎教授

博士、駆け寄ってロープをほどこうとする。

「金っ！来たぞ！早く来い！」

必死でロープをほどく、博士。

博士

「大丈夫？」

爺さん

「わしは大丈夫だ」

婆さん

「わたしも大丈夫」

突然、同時にパタリと倒れる、二人。

博士

「え？」

半信半疑で体を揺する、博士。

反応しない両親。

サイボーグ金がどたと入ってくる。

入口でぼーっと立っている花ちゃんを見て戦

闘ポーズを作る、サイボーグ金。

強く立ち上がり、振り向く博士。

博士

「花ちゃん！そいつは凄く悪い奴だ！悪い奴

はどうする！」

花ちゃん、ハートの目でサイボーグ金を見る。

サイボーグ金、戦闘ポーズから軽くジャブの蹴

りを入れる。

花ちゃんの胸にヒットする。そのまま後ろに倒

れる、花ちゃん。

心配そうに花ちゃんを見る、博士。

博士

「まずい！」

サイボーグ金、驚いて倒れた花ちゃんを見てい

る。

金

「弱い！」

驚いた顔で神崎教授を見る、サイボーグ金。

神崎教授も驚いた顔をしている。

「作戦かも知れんぞ！慎重に行け！」

金

「ういっす！」

サイボーグ金、再び戦闘ポーズを作る。

花ちゃん、倒れたまま動かない。

サイボーグ金、ジャンプしてニードロップを花

ちゃんに喰らわせる。

花ちゃんの気絶してしまう。

心配そうな博士。

博士 「…まずいまずい…」

首を傾げる、サイボーグ金。

金 「…本当に弱いです。こいつ。本当にサイボー

グですか？」

神崎教授 「何だか知らんが、今日は弱いようだ！いつき

にぶつ殺してしまえっ！金！」

金 「ういっす！」

サイボーグ金、倒れている花ちゃんの上に乗る。両手で顔を持ち、一回転させる、サイボーグ金。ゴキゴキとニブイ音がする。

さらにぐるぐると花ちゃんの頭を回転させる、サイボーグ金。

「ぶちっ」という音と共に花ちゃんの頭が取れる。

博士 「花ちゃん！」

頭を抱える、博士。

美里さんの声「ただいまー」

茶の間に入って来る、花ちゃんの初恋の相手。美里さん。セーラー服姿。

美里さん 「おばあちゃんごめんなさい。遅くなりま…」

茶の間様子に啞然とする、美里さん。

美里さん 「…叔父様…」

博士 「美里ちゃん…」

神崎教授 「このかわい子ちゃんは誰だ！」

サイボーグ金、見とれている。

博士 「私の姪の美里ちゃんだよ」

花ちゃん、ぴくりと体が反応する。

「ははは。俺好みのかわい子ちゃんだ。もらっただぞ！」

神崎教授、美里さんに抱きつく。

美里さん 「きやあ！」

博士 「やめろ！変態！」

博士、神崎教授を美里さんから引き離そうとする。

金 「ずるいだす。僕がもらうだす」

サイボーグ金、後ろから抱きつく。

美里さん

「やめてーっ」

博士

「やめろ！」

博士、サイボーグ金を引き離さそうとする。

金

「これでも喰らえ！だす」

サイボーグ金、博士にパンチする。

気絶する、博士。

神崎教授とサイボーグ金、美里さん争奪戦を繰り広げる。

美里さん

「助けてー！」

花ちゃんの体がゆっくり動く。

両手が上がり、自分の顔を探す。

神崎教授とサイボーグ金、美里さん争奪戦を繰り広げる。

金

「これでも喰らえ！だす」

サイボーグ金、神崎教授にパンチする。

神崎教授、気絶する。

博士の上に折り重なるように倒れる、神崎教授。花ちゃんの両手が自分の顔を持つ。そのまま顔を持ち上げる。

左右にゆっくり振る。

美里さんを発見する。

花ちゃん

「すき…すき…」

花ちゃんの全身に電気が走り、光る。

足を伸ばしたまま、誰かに起こされるように起き上がる、花ちゃん。

顔を首にのせる。

花ちゃん

「…わるい…やつける…わるい…やつける…」

花ちゃん、両手を前に出したまま前進する。

サイボーグ金の背中に花ちゃんの手が刺さる。

金

「うげっ！」

痛そうな顔をして振り向き、花ちゃんを見る。ひるんだすきに部屋の角に逃げる、美里さん。

倒れている爺さんと婆さんを発見する。

美里さん

「おばあちゃん！おじいちゃん！」

泣き出す、美里さん。

花ちゃん、刺さった手をそのまま持ち上げる。
サイボーグ金の体を持ち上がる。

花ちゃん 「…わるい…やつける…わるい…やつける…」
そのまま茶の間から出て行く。

茶の間の入口にサイボーグ金の体がぶつかって破壊される。

※七七 二葉亭家・玄関先（夜）

サイボーグ金を持ち上げた花ちゃんがそのまま走って出てくる。

花ちゃん 「…わるい…やつける…わるい…やつける…」

※七八 住宅街（夜）

サイボーグ金を持ち上げた花ちゃんが走る。

花ちゃん 「…わるい…やつける…わるい…やつける…」

※七九 国道（夜）

車が通過する国道。

サイボーグ金を持ち上げた花ちゃんが走る。

花ちゃん 「…わるい…やつける…わるい…やつける…」

※八〇 ベイブリッジのような橋（夜）

サイボーグ金を持ち上げた花ちゃんが走る。

花ちゃん 「…わるい…やつける…わるい…やつける…」

橋の中央で止まり、サイボーグ金を下に投げる。
落ちて行くサイボーグ金。

金 「たすけてだすー」

花ちゃん、手をぼんぼんとはらう。

花ちゃん 「…わるい…やつけた…」

花ちゃんの顔がぼろんと落ちる。

「はっ」と両手で顔をキヤッチする。

※八一 ベイブリッジのような橋・全景（夜）

上空から見た橋の夜景。
手前をヘリコプターがイン・アウトする。

第八十二葉亭家・茶の間（夜）

一人で茫然としている、美里さん。涙も枯れた
ようだ。

倒れている、爺さんと婆さん。

折り重なるように倒れている、博士と神崎教授。

博士、ぴくりと体が動く。

爺さん、ぴくりと動く。

婆さん、ぴくりと動く。

「？」と大きな瞳で様子を見守る、美里さん。

博士、目を開ける。

爺さん、目を開ける。

婆さん、目を開ける。

嬉しそうに笑う、美里さん。

爺さん、上半身を起こす。

爺さん
「：お？」

周囲を見回す。

婆さんも上半身を起こす。

婆さん
「：え？」

美里さん
「よかった！生きてたのね！」

爺さんと婆さんに抱きつく、美里さん。

博士も神崎教授をどけて体を起こす。

美里さん、博士を見る。

美里さん
「叔父様も！」

博士、周囲を見回す。

博士
「：花ちゃん！」

神崎教授も体を起こす。

神崎教授
「：うう……」

両手で顔を持って部屋に入ってくる、花ちゃん。

全員、一斉に振り向き、花ちゃんを見る。

博士
「花ちゃん！」

博士、花ちゃんに駆け寄る。

花ちゃん
「：わるい……やつけた……」

博士、花ちゃんに抱きつこうとする。

花ちゃん、さらりと体を交わして美里さんに向かって前進する。

博士、バランスを崩して倒れる。

神崎教授

「（頭を抱えて）…金がやられただど！」

拳をつくり強く握る、神崎教授。

花ちゃん、顔を前に突き出して美里さんに向かって前進する。

花ちゃん

「…すき…つきあう…」

美里さん、怖がっている。

美里さん

「嫌っ！こないで！」

花ちゃん、自分の顔をさらに突き出して美里さんの顔まで寄せる。

美里さん

「嫌っ！怖い！怖い！（泣いている）」

花ちゃん、美里さんに「チュウ」する。

美里さん

「（叫ぶ）うぎゃー！」

美里さん、花ちゃんの顔に押されて壁に強く頭を打つ。

美里さんの顔がグシャリと潰れる。

花ちゃんの手で持った顔、首を傾げる。

花ちゃん

「…つぶれた…？」

【おわり】